

学力向上拠点形成事業(確かな学力育成の実践研究事業)

平成18年度中間報告・平成19年度実施計画書

【推進校】

都道府県名	広島県	番号	34
-------	-----	----	----

推進校名	広島県広島市立古田台小学校
------	---------------

平成18年度の中間報告について

成果と課題

ア 成果

観点別学習状況国語科「話す・聞く能力」において、A評価の割合が2年では13%、3年では3%の伸びが見られた。

「授業中発表することが楽しい」と答える児童が、2年では6%、3年では2%、6年では4%の伸びが見られる。これは、話す単元構成の工夫をしたり学習のてびきを提示したりして相手と向かい合う場の工夫をすることにより、発表したり話し合ったりすることに関心・意欲を示す児童が増えてきたためと考えられる。

また、単元の最後に他学年に学習の成果を発表する会などの場の設定をしたり、学習をスムーズに進めるためにキーワードをみんなで考えたり、児童の興味・関心や実態に合わせた学習のてびきを工夫したりした取り組みの成果と考えられる。

言葉に関心をもち「ことばのワークシート」2年生「言葉の花束」(2分間)「春」連想した言葉の数を短時間に記入できる児童が増えてきたのは、週1回朝の「ことばタイム」や月1回の「けやきタイム」での語彙指導に取り組んだ成果と考えられる。特に、11個以上書ける児童が、3%から59%となり、大幅な伸びが見られた。

国語科「話す・聞く能力」A B評価児童の割合

H 18年度 の学年	H 17年度		H 18年度	
	A	B	A	B
2年	24%	73%	37%	56%
3年	30%	68%	33%	67%
4年	56%	41%	41%	59%
5年	78%	20%	41%	57%
6年	23%	69%	23%	67%

国語科 児童の関心・意欲の調査結果より

項目	学年	6月	1月
「授業中発表することが楽しい」(「あてはまる」と答えた児童の割合)	1年	91%	81%
	2年	91%	97%
	3年	77%	79%
	4年	97%	79%
	5年	85%	76%
	6年	31%	35%

個数	6月	3月
0~5	55%	7%
6~10	42%	34%
11~15	3%	45%
16~20	0%	14%

イ 課題及び課題解決のための方策

「話す・聞く能力」においてA評価の割合を前年度より伸ばしていくことを目標にしたが、4・5年は達成することができなかった。原因として、次の二点が挙げられる。一点目は、確かな意見や考えがないために、自信をもって話し合うことができないという点である。二点目は、話し合いに生かすための語彙指導が不十分であったという点である。

そこで、確かな意見や考えを持ち、伝える内容を充実させていくための手立てを工夫するとともに、話し合いの場に生きてはたらく言葉の学習を計画的に進めていく必要があると考える。

平成19年度の実施計画について

研究の概要

ア 研究テーマ

「自ら学び，伝え合う力を育てる授業づくり」

～確かな考えや意見を持って話し合う場の設定と語彙指導を通して～

イ テーマについての考え方

確かな考えや意見を持つための工夫をするとともに，語彙指導を継続することによって，観点別学習状況国語科「話す・聞く能力」において，各学年のA評価の割合を，前年度より7%（クラス2名程度）高める。

ウ 研究の実施体制・実施計画

実施体制 校長 教頭 研修部 各学年・学級

実施計画

月	研究内容	参加予定	講師等予定
4月	校内研修会 「研究テーマ・視点・調査」	本校教員	指導主事
5月	実態調査 公開研究授業・公開研究協議会	本校教員 保護者・地域	指導主事 大学教授
6月	公開研究授業・公開研究協議会	学校協力者会議委員	元校長
7月	公開研究授業・公開研究協議会	協力校教員	
9月	公開研究授業・公開研究協議会		
8月	校内研修会 「言語技術の研修」	本校教員	パイロット教員
	校内研修会 「指導案の検討」	本校教員	指導主事
10月	部会内研究授業	本校教員	
11月	研究大会・公開研究協議会	本校教員 保護者・地域 学校協力者会議委員 協力校教員 全市教員	指導主事 大学教授 元校長
12月	実態調査	本校教員	
1・2月	研究のまとめと次年度の計画	本校教員	

エ 研究の視点

1 確かな考えや意見を持って話し合う場の工夫

児童が「伝えたい」と思う内容を工夫し，書いたり話したりして，自分の確かな考えや意見となるような時間と場を設定し，自信を持って意欲的に話し合うようにする。

2 語彙力を高める指導の工夫

言語技術を高める「ことばタイム」と授業を関連させ，計画的に語彙指導を継続して，児童の語彙力を高める。

成果と課題の把握の手立て

児童の話す・聞く能力の定着状況を把握するため，単元ごとの評価の状況を継続的に分析するとともに，標準学力検査CRT（国語科），「基礎・基本」定着状況調査を活用する。また，児童の関心・意欲・態度の状況を把握するため，児童の意識調査を実施する。